フード最低3日分必要
犬猫のストレスケアを

二〇一一年の東日本大震災や一六年の熊本地震、そして今年七月の西日本豪雨。大きな災害の際には必ず、「家族の一員」であるペットを連れて避難生活を送ることの難しさが問題になっている。少なくない被災者が、屋外での生活や車中泊を選ぶ一方、西日本豪雨の被災地では、ペットを受け入れる避難所を開設する試みもみられた。専門家は関連物資の不足を指摘し、飼い主としての備えを呼び掛ける。（天田優佳）

えさや水を入れたペット用の非常用持ち出し袋について説明するNPO法人日本動物介護センターの山口常夫理事長＝岐阜市で

動物介護センター 山口理事長 飼い主に呼び掛け

「どこの被災地でも、ペット用の物資が圧倒的に足りない」。東日本大震災や熊本地震などの被災地で、ペットや飼い主への支援に取り組んできたNPO法人日本動物介護センター（岐阜市）の山口常夫理事長（六七）は、実情を明かす。

熊本地震が発生した一六年四月、山口さんは長年の経験から「被災地では、必要な物資が確実に足りていない」と考えた。すぐに犬猫用のペットフード約一トンを事務所から用意。自身の十日分の食料やガソリンなども持参して、現場へ向かった。

訪れた熊本の各避難所では、ペット用のえさや水を求める飼い主の列ができていた。しかし、発災直後の被災者の物資すらままならない状況。「周囲から『こんな大変なときに、動物のためのものはない』という声が現場で聞こえた」と山口さんは振り返る。実際に必要な物資が確実に足りていたのは、地震発生から四～五日が経過してからだった。

山口さんによると、東日本大震災では空腹から菓子パンを車中泊する被災者と過ごす非常時はペットもストレスが多いが、熊本地震では空き袋を食べて死んだペットもいたという。「ペットフードは必ず三日分を備えておいて」と強調する。

一方で、行政側の対策としては、備蓄品の水などに「動物用」と明記しておくと混乱を避けられるという。

また、避難所にはペットも、ケージに慣れていない犬が夜中に吠えて周囲の迷惑になった事例がある。

非常時はペットもストレスを感じ、下痢や嘔吐をするなど体調を崩すことが多い。パニックになり、リードをかみ切ってしまうこともある。山口さんは「飼い主の声掛けや触れ合いが、ペットにとっては最も大事になる。積極的にケアしてあげてほしい」と呼び掛けている。

岡山県倉敷市立種井田小の体育館に開設された「ペット同伴者専用の避難所」で、愛犬と過ごす同市真備町地区の夫婦＝7月22日

西日本豪雨時 専用避難所を開設

平成最悪の気象災害となった西日本豪雨の被災地でも、ペット同伴者専用の避難所が開設された。

五十二人の死者を出した岡山県倉敷市では七月二十一日、種井田小学校体育館をペット同伴者用の避難所として開設した。八月八日現在、段ボールなどで間仕切りを入れた生活空間に十一世帯二十六人、犬十四、猫二匹が暮らす。ペットはケージに入れて、家族と同じ場所で寝泊まりしている。ほかの教室などは避難所として開放しているが、ペットとその飼い主だけを対象にした避難所となっている。

岡市災害対策本部の担当者は「被災者から『ペットと一緒に暮らしたい』と要望があり、実現させた」と話す。散歩は敷地外でお願いしたり、ペットのトイレ用に専用スペースを設けるなど衛生面にも配慮している。担当者によると「家族と一緒だからか、ペットも夜は静かだ」といい、鳴き声などについて特段の問題は出ていない。一方、ペットフードなどペット用の物資は確保できているが「麦茶や紙皿など、被災者用で足りない物資が多い」という。

岡山県の担当者によると、ほかの避難所でもペット同伴者を受け入れているが、ペット同伴者のために開設されたのは種井田小だけだという。

ケージに慣らし、迷子札準備

愛知県被災動物対策連絡協議会（名古屋市中区）は二〇一〇年、阪神大震災の教訓を踏まえ、ペットとともに避難できるよう災害への備えを記した「平常時における被災動物対策マニュアル」を作成した。

マニュアルでは、ペットとの避難生活で必要となる物資や、ケージ、食事や飲み水用などの器、タオル、ペットシーツ、新聞紙などを挙げている。特にペットフードは最低三日分は必要という。同協議会会長の清水敏光さん（六）は「支援物資が届いても人間優先になる上、ペットの排せつ物の処理は周りの避難者から最も苦情が出る事案。普段からしっかりと準備してほしい」と話す。

飼い主がペットの応急手当てをすることも重要だ。グッズを紹介。ペットフードや水などの食料のほか、普段からかかりつけの病院をつくり、主治医と治療や手当ての方法などについて話し合っておく必要がある。伝染病の広がりを防ぐため、各種ワクチン接種は定期的に受けさせるようにする。

避難所では、動物アレルギーの人などがいるため、ケージに入れておく必要がある。ほえたり暴れたりしないように、普段からケージに慣らしておく。市町村の災害時の対策をあらかじめ調べておくのも有効という。

また、必ずしもペットと一緒に避難できるとは限らない。迷子になる可能性もあるため、手掛かりとなる情報をペットの体につけておく。飼い主の氏名や住所などを記載した迷子札や、マイクロチップを埋め込むなどの方法がある。

一方、清水さんによると、最もやってはいけないことはペットを手放すこと。「野生化してしまったり、死んでしまうこともあるので、責任を持って世話してほしい」と訴える。

ペットと避難した被災者に現状を尋ねる山口さん＝2011年4月、宮城県南三陸町で

東南海地震の記録収集・整理

名大、研究資金募る

一九四四（昭和十九）年、南海トラフを震源に発生した「東南海地震」の記録や記憶を後世に残そうと、名古屋大減災連携研究センター（名古屋市千種区）は一日から、インターネットなどで研究資金を募るクラウドファンディングを始めた。

東南海地震は四四年十二月七日、三重県沿岸で発生、マグニチュード（M）7・9を記録し、死者・不明者合わせて千人以上を出したとされる。しかし戦時中のため、地震の被害などの情報は秘匿されてきた。そのため地震の詳細や体験を伝える歴史的資料は、十分に集められていない。

名大がクラウドファンディングで集めた資金は、市町村誌や古文書といった歴史的資料の収集と整理、現地調査などの費用に使われる。研究成果はデータベース化して名大減災館内で閲覧できるようにするほか、特別企画展の開催も予定している。目標額は三百万円という。専用ウェブサイト（https://readyfor.jp/）から申し込むほか、振り込みでも受け付けている。

センター長の福和伸夫教授は「地震発生から七十年以上が過ぎ、当時を記憶している人も高齢になってきた。徴証を災害の記憶と記録を後世に残すため、写真などの資料もあれば連絡してほしい」と呼び掛けている。

同大では減災館の活動を支援する寄付も募集している。問い合わせ＝電052（789）3468

歴史に学ぶ ㉗ 東海豪雨 水害の戒め刻む

2000年9月11日から12日にかけて起きた、東海豪雨を伝える石碑「東海豪雨水害之碑」が、愛知県尾張地方を流れる新川沿いのあし原公園（名古屋市西区あし原町）にある。

石碑は被災者らが建てた。「東海豪雨から学んだ多くの教訓を忘れず、語り継いでいくことが、使命であると考えている」と防災の誓いが刻まれている。

東海豪雨は名古屋市と周辺の都市部を直撃し、名古屋で気象台観測史上最高の時間雨量97㍉を記録。総雨量は年間雨量の3分の1にあたる567㍉に上った。新川では約100㌔にわたって堤防が決壊。同区や同県西枇杷島町（現清須市）など数㌔四方にわたって、街が土砂やヘドロを含む濁流にのみ込まれた。庄内川や天白川支流からも水があふれ、愛知県を中心に死者10人、負傷者111人など大きな被害を出した。

「東海豪雨を語り継ぐ会」代表の石田音人さん（61）＝同区＝は「近年は西日本豪雨など、温暖化の影響で全国的に水害が増えている」と指摘する。「新川沿いの地域は昔から水害に弱い。大雨が降ったらいち早く避難しなくてはいけないという認識を、住民は持ち続けなくてはいけない」と警鐘を鳴らす。

当時決壊した堤防の前に立つ「東海豪雨水害之碑」を示す石田音人さん＝名古屋市西区あし原公園で

「備える」は毎月第一月曜日に掲載予定。次回は十一月一日です。

（ｃ）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています